

佐藤正己・鈴木昌友*: 稀菌コウボウフデについて

Masami SATO and Masatomo SUZUKI: Notes on a curious fungi,
Dictyocephalos japonicus Kawam. (Tulostomataceae)

コウボウフデ (*Dictyocephalos japonicus* Kawam.) は 1934 年 10 月に斎藤知賢氏が福島県白河町字飯沢で採集した 5 個の標本と, 1941 年 10 月 11 日と同年 11 月上旬に谷田部武雄氏が茨城県久慈郡生瀬村大生瀬三箇ノ掛^{ナマセミカ}で採集した 10 数個の標本によつて, 川村清一博士が命名したケシボウズタケ科の珍種である。

福島県下で本種が発見された時, 川村博士はコウボウフデと仮称したが, それは本種の子実体の外観が先のちびた筆を連想させるので, 弘法筆を選ばずと云われた弘法大師の筆の意味でつけたものと推察される。其後に茨城県下でも発見され, やや新鮮な材料が得られたので更に研究の結果, 上記の新学名を設定し, 一部の関係者に通知したが, 学界に正式に発表する前に川村博士は逝去した。従つて, 近頃になつて出版された原色日本菌類図鑑 7 巻 723 頁 (1954) に本種が解説されるまでは, 専門の菌類学者の間にも全然知られずにいたようである。

昨年の秋に茨城大学に転任して間もなく本菌の存在を知つた佐藤は, 発見者の谷田部



Fig. 1. Six fruitbodies in the forest of Namase, Daigo-machi. (Photo. M. Suzuki; Oct. 5, 1955).

* 茨城大学文理学部生物学教室 Biological Institute, Ibaraki University, Mito, Japan.

武雄氏に其後の発生情况について問合せたが、発見当時在勤の生瀬第一国民学校から、現在の大子高校に転じた同氏は其後発生地を訪れる機会もなく、また発生したと云う話も聞かぬと云うことで要領を得なかつたが、1955年の夏に常陸太田市で開かれた認定講習に出講の際、コウボウフデについて言及し協力を求めたところ、原産地の隣の部落にある内大野小学校に在勤したところのある上野忠教官から、それらしき菌が前記の三箇ノ掛の他に数箇所年々発生することを教示されたので、この講習会に出席して居た内大野小学校の黒羽三郎教官に、生徒を動員して発生地を手広く調査するように依頼した。その結果、9月下旬までに約6箇所に発生しているとの通報をうけたので、筆者等は1955年10月9日に現地調査に出かけ、前記の黒羽教官を始めとして同校校長以下数名の教官と発生地附近の生徒2名の案内で、外大野部落と大生瀬日照部落の数箇所を調査し、生態をカラーフィルムに収め、約40個の標本を採集した。

発生地の状況 本菌の発生地は、何れもクリ、クスギ、コナラを主とする雑木林内の傾斜地で、林木は高さ3-4m内外のものからなり、適度の入射光が地面を照らしていた。丈の高い林木を伐採し、強い直射光が地面に全面的にあたるような所には発生しないようで、数年前に発生したと云う場所に行つて見たが、立木を伐採し、丈の低い幼齢樹だけで著しく強い光線が当たる為か、全然発生していなかつた。

下草としてはアキノキリンソウ、オケラ、タガネソウ、ヤマハギ、サルトリイバラ、

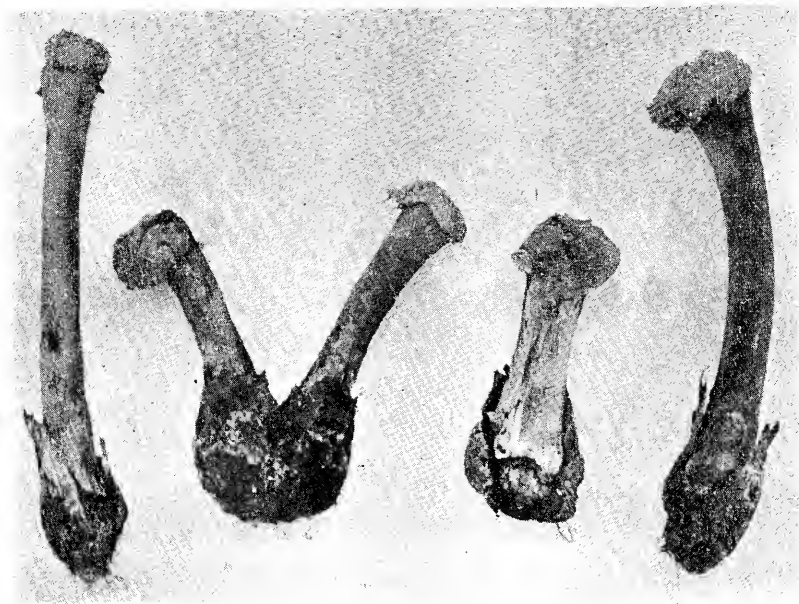


Fig. 2. Four specimens collected in Namase. ($\times 1/2$)

ノアザミ、アズマネザサ、シラヤマギク等が見られ、クリやコナラの落葉が堆積している所に好んで発生し、特にタガネソウが優先種として認められた。

生態と形態 コウボウフデは第1図に示したように数個体が1群をなして発生し、時には第2図にあるように2-3個が基部で癒着することもある。正確に数えては見なかったが、恐らく1本以上が昨秋に発生したと推定される。

脚苞は地中または落葉の堆積の中に埋まつていて、掘出さなければ見ることが出来ない。従つて、この類の発生の初期の過程を調査することは容易ではない。我々が踏査した10月9日には、完全に生育したものか、老熟したもののばかりで、菌蕾から出たばかりのものや、造胞体が破れる前の状態は観察できなかつた。恐らく9月上旬から発生したらしいと云う話であつた。

第1表に十分に生長した子実体の各部の寸法を示したが、何れも川村博士の原記載よりは大型である。これは本年発生したものが特に大きかつた為か、川村博士が新鮮な材料でなく多少乾燥して縮んだ標本で記載された為か明瞭でない。

第1表 生類産のコウボウフデの子実体各部の実測値 (cm)

全体 の 長 さ	莖		胞 子 塊		脚 苞	
	長 さ	直 径	長 さ	最大幅	高 さ	最大幅
16,0	14,5	1,2-2,0	2,5	2,0	5,0	3,0
15,5	14,5	0,5-1,7	1,5	2,3	4,5	2,5
15,0	14,0	1,4-2,0	2,5	3,2	5,5	3,0
14,5	14,0	1,0-1,5	2,5	2,0	4,0	2,5
13,5	12,5	1,2-1,7	2,5	2,8	4,5	2,8
12,8	11,5	0,7-0,9	1,3	1,6	3,0	2,2
12,0	11,5	0,9-1,4	1,0	1,5	4,5	3,0
11,5	10,5	0,5-1,5	2,0	1,8	3,5	2,2
11,5	10,0	0,7-1,0	0,7	1,7	3,0	2,0
11,5	11,0	0,7-1,0	1,5	1,5	3,5	1,7
11,0	10,5	1,0-1,3	1,7	2,5	3,5	2,5
11,0	8,5	1,3-1,7	1,2	2,1	4,2	2,8
11,0	10,0	0,8-0,6	2,5	1,7	3,3	1,5
11,0	10,5	0,7-1,0	2,0	1,2	2,5	1,7
9,5	9,0	1,5-2,5	2,0	2,7	5,0	3,0
9,5	9,0	0,8-1,5	1,5	1,5	3,5	2,0
9,5	8,5	1,8-2,5	2,0	2,7	5,5	4,0

新しい産地 コウボウフデの最初の発見者斎藤知賢氏は既に10年ばかり前に死去し、

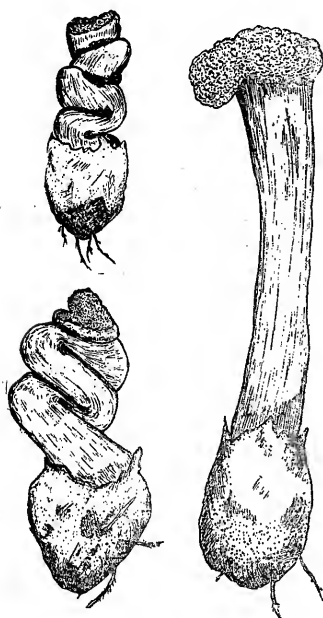


Fig. 3. Two specimens in the left are abnormal type collected at Mt. Sashiro, and one in the right is normal type collected in Namasc. ($\times 1/2$)

間合せるすべもなく、福島県下の二三の生物担当の教官に間合せても要領を得なかつた。

茨城県下では旧生瀬村（現在は大子町に合併）の大生瀬に3ヶ所、外大野に3ヶ所が産地として確認され、其他に不確実な地点が2ヶ所ばかりある。ところで、10月8日に茨城大学で開催された茨城博物同好会で、標本と生熊写真を陳列して説明した為に、翌9日の日曜日に各地に同好者が採集に出かけ、遂に茨城大学学生藤枝みい嬢が、茨城県のほぼ中央の西茨城郡笠間町附近の佐白山でコウボウフデの不完全な標本を数本発見し、大学に持参した。そこで筆者の1人鈴木は早速再調査した結果、完全な標本数本と、第3図に示したように、表面が硬い土壌や障害物が覆われたために十分に伸長できずにいる数個の子実体を採集した。これで本種は福島県の南部と、これに接する茨城県の北端部ばかりでなく、更に約40軒南方の茨城県の中央部にまで分布することが明になつた。

今後もし引き続き発生状況を観察してゆくつもりであるが、一応昨秋の記録をまとめ、紹介しておく次第である。

Summary

The diagnosis of *Dictyocephalos japonicus* Kawam. written by the late Dr. S. Kawamura in 1934 had been kept unpublished for about twenty years, until his manuscript was published in *Icones of Japanese Fungi*, vol. 7, p. 723, pl. 715, (1954). The diagnosis was made by him based on the materials collected in two localities: (1) Iizawa in Shirakawa-shi, Fukushima-ken (coll. T. Saito; Oct. 1934), and (2) Namase in Daigo-machi, Ibaraki-ken (coll. T. Yatabe; Oct. 11 and 20, 1941).

Co-operative with the teachers and pupils of Uchiono Primary School, the writers made a survey of this curious fungi, and found several new localities in Daigo-machi, and collected many specimens for study. Afterwards, we found this fungi at the foot of Mt. Sashiro, situated at about 40km southward from Daigo-machi.